

追悼

## 大澤先生の真面目

小山 高正

195

昨秋、大澤先生が亡くなられた。古くから、親子は一世の契り、主従は三世の契りといわれるが、師弟も主従関係に近いものとするならば、先生の他界が親の死よりも心の空白をもたらしたとしても不思議はない。実際、多くの人が大澤先生の逝去に際して、同じことを感じたように思う。小柄で痩せた体つきでいらつしやりながら、その所作口調には凛とした雰囲気がい、お会いすると必ずこちらの姿勢が正される。かといって近づきたいかという、その柔らかな顔面には誰しもが無条件に引きつけられ、思わず知らず縋りたくなるような気にさせられる不思議な魅力があった。さらに、一度でも食事を共にすれば、こだわりの食に出会ったときの先生の得心顔、そこに杯を傾けたときの幸せそうな笑み、人間大澤が前面に出て、誰もが大澤ワールドに引き込まれてしまうのである。そこには師弟の隔たりはあるものの、「自己のすべてを委任せよ」という心情に無意識のうちになつてしまう。そういう雰囲気の世界である。しかしそんな時でも、私どもに自己を自己として意識させるのは、大澤先生の中に学問への熱い思いがあるからであり、私どもにも同様な学への志があるからである。

先生は三年前に傘寿を迎えられた。それを寿ぐ意味から、研究センターの音頭取りで記念文集が編まれた。私は丁度海外研修でロンドン滞在中であったが、幸いにも寄稿させていただく機会に恵まれた。その中では、先生との出会い、大阪大学大学院在学中に先生が幾度か足を運んでくださったこと、恩師前田嘉昭教授を研究所での講演や研究会に何度かお招き下さったことなどの思い出を語りながら、大澤先生がその背後にお持ちであった精神伝統への思いの強さに気づかせていただき、改めて感銘した旨を記させていただいた。また、一昨年には、この同じ『モラロジー研究』で、先生がご自身の手で著書や講演をまとめられた『師の心を求めて』の書評をさせていただくという榮譽に浴することができた。先生の京都大学卒業論文でもあった「福沢諭吉における自立教育の立場」、また学園に戻られて間もなくされた連続講演の原稿であった「後生への最大遺物」、そしてさらに、先生の恩師でもあり、この研究所の顧問でもいらした下程勇吉先生、国立教育研究所所長でいらつしやった平塚益徳先生、東洋法政史学者としての廣池千九郎をわれわれに再認識させていただいた同志社大学教授内田智雄先生、歴史小説家山岡莊八先生などの著名な人物が廣池千九郎と出会う場に立ち会われたその生々しい現場を紹介下さった珠玉の文章などなど、大澤先生が渾身の力をふりしぼってご自身の思いを文章として遺して下さったその最後の著書への書評、私はその場をお借りして、先生への思いの丈を語らせていただいた。その書評は、幸いにも先生がお元氣なうちに読んでいただくことができ、喜んでいただけただけという事で、先生にお世話になり、ご心配をおかけしたわが身も少しは軽くなった思いがしたのである。今回、追悼文のご依頼を受け、先生についてこれ以上書くことがあるだろうかと一ヶ月の間、散々に悩み、眠れぬ日々を過ごし、先生の真面目は一体なんなんだろうかと思いを巡らせた。そして、それはやはり先生の理想主義的精神ではないかという思いに至った。

これは私の個人的見解で、さしたる証拠があるわけではないのだが、一九八九年ベルリンの壁が崩れ、続いてソビエト連邦が崩壊して、事実上共産主義国家が地上からなくなった。それと同時に理想主義が消えたのではないかという思いが私にはある。共産主義国は権力闘争に明け暮れ、独裁政権の恐ろしさをまざまざとわれわれに見せてくれたとはいえ、共産主義思想そのものは、いずれの国においても若者の心情をとらえてきた歴史があることから、非常に理想主義的な部分をもっていたのである。その共産主義が目の前で崩壊していく様を見た若者たちは、現実主義、実用主義に走らざるを得なかったのではないだろうか。そこで、このところ新聞を賑わせてきた若い経営者たちは、金儲けにしかその理想を持ってなくなった人たちなのではないだろうかと勝手に想像している。教育界もまさにその洗礼を受けているとあって良い。創立者の教育理念を理想の教育目標として掲げた私立学校でさえも、そこで競うよりは、有名高校、有名大学に何人の生徒を送り出せたかの数を争っている。すべての大学は、マスコミによって、その設備、就職率、外的資金の獲得件数、そして受験偏差値からランキングされ、その上位を目指して生徒集めにしのぎを削っているのが現状である。その大学の目指す人物像を知る学生がどれほどいようか。今の小中学校で、子どもが少しでも理想的なことを張り切って発言すると周りがしらけるという。しかし、それは子ども、生徒の社会だけではなく、大人である教師の世界も同じ状態ではないだろうか。すべてがベルリン崩壊以降とはいわないが、ここ二〇年特に強まったと思うのは私だけであろうか。そんな、世の中の趨勢の中でも、一貫して人間的理想を掲げてきたのがモラロジー研究所であり、その背骨を支えたのが大澤先生の情熱だったのではなかったか。先の書評の中で、大澤先生の理想主義精神の源泉について私は次のようなことを述べた。少し引用しよう。

「精神の自主独立と合理的実証主義に基礎づけられた学問と生活の実学的統一を一貫して標榜し、節を枉げず、権力に屈せず、勇氣をもってその思想を實踐していった福沢諭吉」(三二二頁)に見る自立教育の出発点は、北川治男氏をして「大澤先生の若者を凌ぐ理想主義的精神の前に、中途半端にプラグマティックな私はいつもたじろぐばかりで」(『傘寿記念文集』二四九頁)と言わしめた先生の理想を求める情熱の濫觴になっているという推察もあながち間違いではあるまい。(『モラロジー研究』第五八号、二二〇頁)

しかし、今回この追悼文を書くに当たり、先生の旧著『青年教師 広池千九郎』を読み返してみた。そして、あの書評で行った推察が間違いであったように思えてきた。やはり、大澤先生の理想を求める情熱の源泉は、若き日の廣池千九郎であつたはずである。以下、いくつか先生の文章を引用してみたい。

「我、家産一萬円ニ達スレバ、孤児五十人ヲ養フン」と書きしるされた「廣池」先生の胸中には、おそらくこのときペスタロッチーの姿が思いえがかれていたのではないであろうか。「只、悲しむべきはかの日一日、其数を増し、其勢を甚しくする貧民のことである。此貧民を教育することが一番心配であります。——師範学校の先生のうちに此心あるものが乏しく、又小学校教員にペスタロッチーの人が少いから困ります」とも書いておられる先生は、みずからもまた、東洋のペスタロッチーたろうとされたのでしよう。(二二頁)

「廣池」先生の形田小学校在職はわずかに二年でした。しかも先生は、ようやく二十歳になったばかりの青年教師でした。それでもなお、この壮行のさかんなることを思えば青年教師廣池千九郎先生が、いかに熱烈な教育愛に燃え、心身をかたむけ、誠をつくして子どもの教育に尽瘁されたかが思い知られるでしょう。こうした努力は、もちろん万田小学校、中津高等小学校に転じられてからも一貫してつづけられ、万田小学校の教育改革、中津高等小学校の教育や寄宿舎制度の改善、また大分県共立教育界での活躍にもはつきりと見られます。(二七頁)

当時の廣池先生にとって学問とは、個人の立身出世のための方便であったり、書齋の中にあつて知的好奇心を満足させる「学問のための学問」ではありませんでした。それはまさしく「社会ノ福祉ヲ増進スル如キ大目的ヲ有スル者」であつて、本来的に、現実の矛盾を克服し、世益を図り、社会を實際に進歩向上に導く、社会的使命をもつものでありました。この「世ノ幸福ヲ維持増進スル」、あるいは「世ヲ益スル」のが学問の目的であるとする考えは、その後を通じ先生の生涯変わることのない学問観であつたといえるでしょう。(五八頁)

大分県教育互助会は「顧みて我同職諸君の前途を考えうれば、実に酸鼻に堪えざるものあり」と憂えられた青年教師廣池千九郎先生の、それゆえにこそ「自他の幸福と教育の繁栄」とを祈り願わずにはいられない、その至情と熱意から発した尽力によつて、全国に先がけてはじめて設置されたものです。(九

これらの文章は、まだ三十代だった大澤先生が若き日の廣池千九郎を思いえがいたものである。そこにはモラロジーの父廣池博士に傾倒した先生の心情が遺憾なく表明されている。十七歳で東亜専門学校の門をくぐられ、「博士の魂のよりどころであつた道徳科学研究所を解消してまでも、時流におもねることを潔しとせず、最後まで軍国主義にくみしなかつた千英先生。大東亜省が南方要員の錬成を学園に依頼してきたとき、国家の財政援助を拒絶することを条件として承諾された、徹底して権力に頼らなかつた千英先生」〔師の心を求めて〕一四五頁との出会いが、その後の先生の人生を決めることになった。「千英」先生は国家主義、軍国主義を排されたオールド・リベラリストであられた。しかし、だからといって、いわゆる個人主義者、自由主義者ではなく、それ以上に、やはり、平和の原理に立つモラロジーを自己の人生観、世界観として一切を処してこられた。まさしく博士の思想・精神を全的に受けとめられ、軍国主義に塗りつぶされた当時の日本教育の潮流の中に卓然自立の道を開かれた、独往の先生であられたと思う。」（前掲書、一四六頁）まさに、千英先生を通して、その心底にある博士の教えを肌で学ばれたからこそ、その後の大澤先生の理想主義精神が確立したといえるのである。

私がまだ大阪で学生であつた時分、前年に癌で亡くなられた森昭教授のご自宅にお線香をあげに寄らせていただいた。その折、奥様が「一周忌の記念にと、主人の歌をまとめました」と『光芒』と題された森先生の句集を頂戴した。その足で、京都で大澤先生とお会いして食事をご馳走になったときである。先生に、森先生の本をお見せすると、ちょっと読ませて欲しいとそれをもって新幹線に乗り込まれた。その後、先生から葉書を頂戴した。先生は、その句集を東京に着くまで読みとおし、その間ずっと涙を流されたというので

ある。当時の私には、先生が涙を流すということさえ信じられなかったが、その感動を全身で表されるお姿こそ、理想を追求する教育者としての情熱あふれる先生のお姿であり、先生の真面目躍如たるお姿だったのではなかったかと今にして思うのである。

五年前に豊子奥様に先立たれた先生には、早く奥様のもとに行きたいというお気持ちがあったのではなかろうか。お一人になられてからも、全国に呼ばれてお忙しくされてはいたが、帰宅されてその報告を聞いてくれる伴侶がないということは本当に寂しいことではなかったかと拝察するのである。一科学者として死後の世界を信じるとは浅はかなことかも知れないが、先生が奥様と語らいのときをお持ちになっていらっしゃるであろうことを信じたくてしょうがないのである。また、無性にそれが嬉しくてたまらないのである。この一文を捧げ、先生の志を受け継ぐ弟子の一人として、大澤先生、豊子奥様のご冥福を心からお祈り申し上げます次第である。